



Respect each other

中村 克己

カルソニックカンセイ
 取締役会長

今年の大河ドラマは、幕末が舞台です。将来への危機感と閉塞感、それを打破していく人の力をどう描くのか、期待して見たいと思います。というのも、多少の変化の兆しはあるにせよ、現代の日本人が抱く将来への危機感と閉塞感、幕末と同様に高いものがあると感じているからです。この国が将来も今と同じ地位を保ち、かつ成長していくためには、世界の中で仕事をして貢献することでしか成り立ちません。私も十年にわたり海外で仕事をしてきましたが、「日本」というブランド価値が衰えていない今のうちに、「世界の中での日本の位置」をつくらなければならないのではと危惧しています。

国と国との関係では、残念ながらいくつかの国とはスムーズとはいえない状態ですが、一歩足を踏み込んで人と人との関係を築こうとすれば、多くの国で「日本」を受け入れてくれます。日本や日本人に対するイメージは、諸先輩方の努力もあり、おおむね良好です。しかし、それは巷間いわれる日本製品の優秀さうんぬんよりも、東日本大震災での日本人の姿に多くの国が感動したように、日本人が持っている「相手を尊重 (Respect) する」という心情によるところが大きいと感じます。

私は日産自動車に勤務していた時に、ルノーとのアライアンスに深くかかりました。ご存じのように、このアライアンスはカルロス・ゴーン氏という傑出したリーダーを得たことで、大きな成果を上げています。彼から経営者としてのリーダーシップやマネジメントの要諦について多くのことを学びましたが、私が最も深く感化されたのは、当時のルノー会長であったルイ・シュバイツァー氏が「アライアンス憲章 (Charter)」の基本理念で謳った「Respect each other」という理念です。お互いを尊敬し合う関係が築けなければ、共通の目標を持って協力することはできず、自分がRespectされていると思えなければ、やる気も起きません。考えてみれば当然ですが、これが実に日本人である私の心境にフィットしました。実際に、この理念を堅持していることこそが、ルノー・日産アライアンス成功の要因であり、私自身も、中国、フランス、中近東、アフリカなど多くの国の方々と仕事をする中で、「共通に効果的な理念」と実感しました。

われわれの先達が歴史の転換点に立ったとき、新しい考え方には常に尊敬の念を持って接し、学ぶだけではなく必ず自分自身で考え、危機を乗り越えてきました。この謙虚さと真摯な気持ち、自分の頭で考える力を持って、世界の中で活躍できる日本・日本人であり続けるためにはどうすればよいのか。皆さんと一緒に考えられたらと思います。

次回リレートーク：星野 朝子 (日産自動車 常務執行役員)